
神は何を思う？

桜花蒼衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神は何を思う？

【Nコード】

N9296S

【作者名】

桜花蒼衣

【あらすじ】

車に轢かれそうになった子供を助けるため、道路に飛び出した大神響は、闇の中で一筋の光を見た。

『家族が欲しいか？』の問いに、『欲しい』と答えた響が目覚めたそこは……。

転生、最強？な主人公。NLとBLの2つの恋愛模様が入る予定です。

評価ありがとうございます。これからも頑張っていきます。7 /

プロローグ（前書き）

初投稿です。優しい目で見てください。

プロローグ

かすかな光に目を開けるとそこは闇の中だった。小さな光が俺の存在を気付かせる。

ああ、確か子供を助けようと、車の前に飛び込んで……。

俺は死んだのか。

『おおがみひびき大神響家族が欲しいか？』

闇の中で声が響いた。

「欲しい」

俺は頷いた。

『この世界を棄ててもか』

この世界？

今だかつて、この世界が俺に何かしてくれたか？

俺は、家族が欲しい。

俺を愛してくれる家族が。

だから、俺は頷いた。

「ああ、俺はこの世界を捨てる」

光は消え、完全な闇が広がった。

始まりは3歳の誕生日

グレンが響だということに気づいたのは3歳の誕生日を迎える少し前のことだった。

何がきっかけなのかはわからないが、ふと自分の前世を思い出したのだ。

前世、大神響は、平凡で非凡な高校生だった。まあまあの容姿、凄まじい運動神経、素晴らしい頭脳。

だが、響は、独りだった。

両親は揃っていたが、彼らは響に無関心だった。どれだけ賞を取っても、模試で1番になっても、関心を全然向けなかった。学校の友達も、勉強にしか興味がなくそこでも独りだった。

そして、学校からの帰り道。道路に飛び出てきた少年を助けて響は死んだ。

そして今、グレン・アードルベルト＝フェルトとして生きている。男から女になったのは誰の差し金かは知らないが。

始まりは3歳の誕生日2

とても晴れた日だった。庭で遊んでいたグレンは、兄に呼ばれて振り向いた。

「ユーリにいさま？ な〜に？」

響の記憶を持つが、肉体的には2歳のグレンは行動も幼くなっている。響は、その口調に内心笑いながらも嬉しくて仕方なかった。響の時には感じなかった愛情を感じ、とても充実した日々を送っていた。

「お客様だよ」

手を差し延べる兄にグレンは飛びついた。

3歳上の兄、ユーリは、黒髪黒目で母と良く似ていた。

魔力の強いとされる黒を身に纏うその姿は、国中で評判になっている。自分と同じ色をしている優しい兄は、グレンにとっても誇らしいことだった。

「おきやくさまってだれ？」

「グレンも、初めてだね。アレキサンドル・イーガツェリ。父さんのお友達らしいよ」

父のお友達という言葉にワクワクしながらグレンは抱かれていた。

始まりは3歳の誕生日3

ユーリに連れられて、父であるエイス・アーダルベルトⅡフェルトの執務室に入った。

入ると同時にユーリの腕からピヨコンと飛び降りる。

部屋の中を見渡すと、父の他に、レイモンド・シックザールⅡベルニコフ宰相を見つけた。腰まである濃い青色の髪は、黒に近く、薄紫の目は笑みを称えている。普段は優しいけど、怒らせると怖い宰相を、グレン達は、レイと呼び慕っている。

その向かいに、アレキサンドル・イーガⅡツェリらしき青年がいた。

「よく来たな。アレク。俺の息子のユーリと娘のグレンだ」

「初めまして。エイス・アーダルベルトⅡフェルトが第一子、ユーリ・アーダルベルトⅡフェルトです。この出会いにハクヨウ様の御加護がありますように」

「はじめまして、グレン・アーダルベルトⅡフェルトです。このであいに、ハクヨウさまのごかがありますように」

ユーリの真似をしてグレンも挨拶をする。

「これは、これは。ご丁寧な挨拶を。オレは、アレキサンドル・イーガⅡツェリ。王宮騎士、第一騎士隊隊長だ。アレクと呼んでくれ。この出会いにハクヨウ様の御加護がありますように。よろしくな」

笑う笑顔は男らしく、茶色い髪、碧い目にとてもよく似合った。

父の友達にしては、2つ3つ若かった。

それでも、剣に疎いグレンにもわかるほど隙のない態度だった。導かれるままに、父の膝の上に座る。後ろから抱きしめられ、少し痛い、楽しそうな雰囲気伝わってくるので、グレンはそのままにしておいた。

「それにしても、溺愛だな。エイス。国王としての威厳が台無しじゃないか」

父、エイス・アーダルベルトⅡフェルトは、ハクヨウ王国の国王である。

26と若いながらも、治世は8年を過ぎ、賢帝であると評判らしい。

ハクヨウ王国は、この世界の西にあるアステシア大陸を治める国。風の加護を受けており、風の大賢者が大陸一帯を管理している。時々、白い鷹がお告げを持ってくるから、白鷹ハクヨウとついたら、レイが教えてくれた。

「いいだろ？ お前も恋人を見つけられればいい。そうしたら、わかるだろう」

父の言葉に、アレクは顔をしかめる。

「俺のことは置いて。姫さんの誕生日は1週間後、だろ？ なんで俺に、今日までに帰って来いって言ったんだ？ 他の騎士隊もいるし、当日でもよかったんじゃない」

「グレン」

「えっ？」

「グレンってよんでください。ひめさんはなんかいやです。アレクさま」

「俺も、ユーリでいいです」

姫さんと言われるのが嫌で、グレンはそう進言する。ユーリも勢い込んでそう言った。

「そうか。グレン、ユーリ。俺もアレクでいいぞ」

明るく笑うアレクに、隣に座っていたユーリと顔を見合わせて笑いあふ。父は少し嫌そうな顔をしていたが渋々頷いた。

「仕方ないな。だが、娘はやらん」

「何言ってるんだよ。グレンは今年3歳だろ？ 俺は今年、23歳。20歳も違うの」

「20歳がなんだ。俺の父は、25歳、離れていたけど？」

ヒートアップしていきそうな2人を止めてもらおうと、レイを見上げる。レイは呆れた風のため息を付き静かに話し出す。

「2人とも、いい加減にしないと怒りますよ」

冷たい響きに、エイスとアレクは押し黙る。と同時にグレンは思
い出した。父と、レイ、シックザール宰相は幼なじみだったことを。

始まりは3歳の誕生日4

話があるからと子供達を追い出したエイスは、アレクに真剣な顔を向ける。

「どうだった？ カレイラ州は」

「料理もおいしいし、水もきれい。それに女の子も綺麗だし？ サイコーだったぞ」

アレクは明るくそう言ってから声をひそめる。

「州を治める貴族、オーガスト伯爵は、知らないと言っていたが、あれは知っている顔だった。間違いなく反乱は起こる」

「やはり、そうか。起こるなら1週間後のグレンの3歳の誕生日パーティーだろうな。公式にお披露目するのは明日だが、パーティーは11州を治める貴族を招いてだからな」

考え込むようにエイスが言った。

カレイラ州は、海に面した州で、いくつかある貿易の拠点の一つ。中でも1番王都に近い。

そのカレイラで『反乱の疑い』という報を、特務調査官からエイスが受け取った。そこで、命令で国中を回っていたアレクに、予定になかったカレイラを視察するよう頼んだのだ。

「そして、早ければ今日から、パーティー出席者が離れの城に滞在します」

感情の無い冷静な声で、レイが告げた。遠いところの州は、早めに出発し、王都で準備をする。また、近くの州も、離れの城、といつても王城であることから、早めに来る人が多い。

「だからか。わかった。パーティーが終わるまで、俺は、グレンやユーリを護ればいいと」

「ああ。それと、レイの息子もだ。パーティーでは3人まとめて遊ばせておくからな。部下は2人まで。その2人には、今後も護衛をさせることを考えて選んでくれ」

息子もと言われた時、レイの眉が軽く上がった。すぐに戻ったが、心配なことが伺えた。

「了解。2人見繕ってユーリ達に対面させる。で、子供達は？」

「多分、私の息子と一緒に……」

レイは目を閉じて少し考え込んだ。魔力を探っているのだ。そして、淡々と告げる。

「騎士達の訓練所に向かってます」

了解とばかりに手を振り、アレクは執務室を出て行った。

始まりは3歳の誕生日5

執務室から追い出されたグレンとユーリは、図書室に来ていた。茶色い趣のあるドアを静かに押し開け中に入る。

迷路のように棚が並び、天井まである棚には、隙間なく本が詰まっている。その様子に、目を奪われつつも目的の人物を捜す。

「ケン。いた」

ユーリが声を張り上げる。

「ユーリ、静かにして。ここ図書室。でも久しぶり」

ユーリが声をかけた先には、ユーリと同じくらいの年の少年がいた。少年もまた、黒髪黒目をしている。少年は手にしていた本を棚に戻し、ユーリに返事をする。

グレンはユーリの横を通り抜け、ケンと呼ばれた少年に抱き着く。

「グレンも」

「こんにちは。ケン兄」

そう言って微笑むとギョツと抱きしめられる。

「もうかわいいんだから。で、どうしたの？ 何か用？」

「用ってことはないけど。父さんに呼び出されて、アレクに会った帰り」

「アレクって、アレキサンドル・イーガツェリ？」

「知ってんの？」

ケンはグレンから離れて、ユーリに向き直る。

「うん。朝、父様と一緒に会ったよ。騎士隊隊長らしいけど、エイス様の命で国中を回ってたんだって」

新しい事実にはユーリの顔が輝き出した。

とてもわかりやすい顔にケンがふきだす。

「話が聞きたいんでしょう？ なら、訓練所に向かおう」

「訓練所？ どうして？」

「騎士隊の隊長でしょう？ まだ、日が高いから、エイス様とお

話が終わったら、そっちに向かうんじゃない？ それに、今日は、新しい魔法の実験もするんだって。父様がいつてた」

「レイが？」

ケンは、レイの子供でケン・シックザール＝ベルニコフという。

「よし。行ってみよう」

ユーリの決意にグレン達3人は、訓練所へ向かうドアを開けた。

始まりは3歳の誕生日6（前書き）

大分時間が空きましたすみません。

始まりは3歳の誕生日6

訓練所まであと半分という所で、後ろから足音がした。振り向いてみるとアレクだった。

「よう、ユーリ、グレン。ケンも一緒だな」

「アレク！！ 今、アレクに会いに行こうと思ってたんだ」

「あと、魔法実験があるって聞いて」

ユーリとケンがアレクに答える。

その間に、グレンが近寄って行くとアレクに抱き上げられた。

「アレク。あるけるからおろして」

そう言って、グレンは子供ではないと主張してみる。

「今は、2時少し前。あと、10分で魔法実験が始まる。間に合わないぞ？」

しかし、アレクは、腰に付けた時計を見てそう言った。

若干笑っているのが腹立たしいが、見たかった実験について言われグレンは押し黙る。

時間や、長さ、重さなどの単位は、日本、というより、地球で多くの国に採用されていた単位と同じであった。

時間は24時間で、分、秒があるし、長さはcm、m、重さはkg、gなどまるっきり同じだ。数字の桁は、万、億など、日本と同じで、無量大数まであるらしい。

それはさておき。

訓練所までは、子供の足で10分。3歳児のグレンがいるとなるとギリギリの所だ。

結局、アレクに抱き上げられたまま、訓練所に向かった。

訓練所は、王宮の南西にある門を抜けていく。

「アレクは、国中を廻っていたんでしょ？ どこが一番食べ物があ

いしかった？」

「うーん。悩むな。どこもおいしかったんだが、一番なら、イリア州のヴィオレ地方かな」

道すがら、ユーリが質問する。

「ワインがとてもおいしいし、パスタも他と違ってかなりおいしい」
「いいな」

日本と同じ名前の食べ物が多くあるのも不思議な気分にした。
時間や長さの単位、食べ物、世界共通で遙か昔に栄えた文明の名残らしい。

ユーリとアレクの会話を聞き流しながら、そんなことを考えていると、いつの間にか門を過ぎ騎士達の寮が近づいていた。いつもより高い目線からは、グラウンドが見え、騎士がいたりきたりしている。

近づいていくにつれ、白い円が2つあるのに気付いた。

始まりは3歳の誕生日7（前書き）

遅くなってすみません。

次はもうちょっと早く投稿できるようにします。

始まりは3歳の誕生日7

近寄っていくと向かって左側の円の中に、2人の青年がいるのに気付いた。どちらも背が高くアレクより少し小さいくらいに見えた。一人は茶色の短髪。もう一人は朱色の髪で、襟足が長くなっている。アレクが近くにいた責任者と思しき騎士を捕まえ、2人について聞いた。

「彼らは？」

「あ、アレク隊長。お帰りなさい。それに、ユーリ様、グレン様、ケン様。いらつしゃいませ。円の中の2人は、最近入った新人騎士です。魔力が全く無いらしいので実験に協力してもらっているのです」

グレン達に笑顔で挨拶を交わし騎士が答える。

「魔力が無いのに王宮騎士隊入りか。剣の腕は上級だな」

「今日の実験つてさ、何？」

アレクの呟きを無視したケンが、騎士の服を引っ張って尋ねる。

「失礼、ケン様。今日は、遠距離用移動陣の作動実験です。魔力が無い人でも動かせるかを検討します」

騎士が言うには、遠距離の移動は、神が作ったという各大陸をつなぐ魔法陣と、王都から神と賢者が住まう場所であるアカシア島までの魔法陣しかなかった。

また、遠距離移動用の魔法陣を発動するには、かなりの魔力を消費するため、特定の人しか使えず、遠距離移動はもっぱら馬車になっていた。

そこで、魔力の無い者でも使える移動陣を開発していた、ということらしい。

「で、今日が実験です。出発地点と到着地点に陣を描き、出発地、到着地両方に外部から魔力をためます。これで、移動者が、魔力無しでも大丈夫なはずです。そして、移動者が目的地の情報を読み上

げることです。今は、現在地から、東に、何mというようなになっていますが、もし成功したら将来的には、その土地の名前だけで発動するようにする予定です。今日は最初なので、距離は、100mにしてみました」

「うん。十分だよ。魔力なしで、100m移動できたらすごいじゃん」

ケンの言葉にユーリとグレンも頷く。

前を見ると、どうやら到着地に魔力を入れ終わり、出発地に魔力を注ぎ込んでいるところだった。

緊張の面持ちで見つめていると、どうやら魔力を入れ終わったらしく、2人の兵士が発動用の移動座標を読み上げていた。

読み終わると同時に、まばゆいばかりの光に包まれ、気付いたら100m先の目標地点に2人がいた。

「せ、成功だ！」

その一言をきっかけにあらゆる所から歓声があがる。

グレンもアレクの腕の中から飛び下り、ユーリと跳ね回る。そこに、魔法陣の中にいた2人が近づいて来た。

「セイル班長。実験は成功みたいです。一応、今から検査をつけますが、多分大丈夫です」

茶髪の男の言葉に、朱色の髪の男が頷く。

2人は近くでみるととてもかっこよかった。向かって右の茶髪の方は、瞳が淡い茶色で意志が強そうな目をしている。そして左側の朱色の方は、目はとても綺麗な空というよりは、透き通った海の青で、楽しい雰囲気伝わってきた。

「ああ。ご苦労だった。そうだ、医務室へ行く前に紹介しよう。王宮騎士第一騎士隊長のアレキサンドル・イーガツェリ様。また、こちらが、ユーリ王子とグレン王女、宰相閣下子息のケン様です」
そう言ったセイルに、2人は姿勢を直す。

「こちらの2人は、向かって右がりヒト・フリーユゲル。左が、ジョシア・フューレンです」

セイルの言葉に2人は軽く礼をする。

「リヒトにジヨシユアか。俺のことはアレクでいい。これからよろしくな」

「はい。よろしく願います」「」

2人の声は綺麗に重なり青空に響いた。

始まりは3歳の誕生日8

明日のお披露目の衣装を選ぶということで、部屋に3人を送り届けアレクは医務室に急いだ。

少し駆け足で、医務室のドアを開くと、検査は終わったのか2人は騎士のアンダーである、焦げ茶色のハイネックのノースリーブ姿だった。

「アレク隊長。そんなに急がれてどうしたんですか？」

リヒトが着替えの手を止めてアレクに尋ねた。

「ああ。お前達2人に頼みたい事があってな」

「頼みたい事、ですか？」

アレクは、側にいた医師に部屋を出ていくように頼み2人に向き直る。

「ああ。今週末に、グレンの誕生日パーティーがあることは知っているな」

「ええ。グレン王女の3歳の誕生日パーティーですね」

ジョシユアが頷く。

「そのうえ、カレイラが反乱をおこそうとしている疑いがある」

物凄い重要な情報をさらっとアレクが告げた。その情報の重要性を理解した二人の顔が固まる。

「そんな情報を軽々しく話していいんですか」

「というか、引き返せない状況に追い込んで何させるつもりですか」
焦ったような顔の二人に、アレクは笑いながら告げる。

「喜べ。お前らを王子、王女、宰相閣下子息の護衛に任じる」

アレクは満足気な顔をして、引き攣ったような顔の二人を眺めた。

始まりは3歳の誕生日9

国民へのお披露目も滞りなく終え、自室までの長い道を歩いていた時、グレンの前にカレイラ州を任されている貴族、オーガスト伯爵が現れた。護衛なのか、兵士を二、三人引き連れている。鎧は無いが、引き締まった身体から相当の実力が見てとれる。しかし、グレンはその兵士に違和感を感じた。主である伯爵じゃなくこちらを探るように見てくる。

恐怖を感じ今日付けで護衛になったジョシアの後ろに隠れる。

「これはこれは。グレン王女ではありませんか」

大袈裟な動きをつけて寄って来た伯爵は、明らかに待っていたのに、さも偶然であるかのように声をかけてきた。

オーガスト伯爵は見たところ50代。錆びたような赤色の髪に、同形色の口髭を生やしていて、目はくすんだ翠。

州を統治する貴族にしては品の無い目をした伯爵に、グレンは嫌な予感を覚える。

「何か御用ですか？」

ジョシアが尋ねる。伯爵はジョシアに冷めた視線を向けた後、グレンに笑いかけてくる。グレンは、その笑顔にどこか冷たい印象を受けた。

「いえいえ。何もございませんよ。偶然お会いしただけですから」

そして笑顔のまま、ねっとりとした絡み付くような言葉遣いで話しかけてくる。

「では、失礼します」

そのまま去っていくのをグレンは胸騒ぎを覚えながら、見送った。

始まりは3歳の誕生日10

パーティー当日。

グレンは、ノースリーブのかわいらしい白いワンピースを着ていた。胸元には3段のフリルの上にピンクの花が綺麗にならび、スカート裾にもかわいらしい刺繍がほどこされている。ウエストは王家と宰相一族にのみ許されている、黒のリボンを巻き、後ろでリボン結びにしてある。

護衛にはパーティーの主役だからかアレクがついている。

「イーガ第一騎士隊隊長。視察はどうでしたか？」

「オリヴィア伯爵。ええ、話をしたいのはやまやまなんですが、今は護衛任務中なもので」

「アレク。いいよ。わたし、ユーリにいさまとおはなししているから」

グレンの言葉に一瞬アレクは黙り込むが、すぐにユーリの護衛についていたジョシユアをこちらに呼んだ。ジョシユアは側にいたケンの護衛についている、リヒトに目で合図をしてからかけてきた。

「ジョシユア。済まないが少しの間、グレンお嬢様を頼む」

声に出さず、深くジョシユアは頷きグレンを促してユーリたちがいる方へ歩き出した。

ユーリたちの元へたどり着き、アレクの方を見ると軽く微笑まれ、それからオリヴィア伯爵に向き直り話し始めた。

「グレン。どうしたの？」

「アレク、おはなしちゅうだから、にいさまにあいにきた」

「もう、なんてかわいいんだ」 グレンの言葉にユーリが抱きしめてくる。3歳児では苦しいくらいの力に目でケンに助けを求めた。

「はいはい。ユーリ。グレンが苦しそうだよ？」

ケンの言葉に力が緩められ抱きしめられていた腕の中から脱出する。

「ケンにいさま、ありがとう」

「どういたしまして」

感謝の言葉に優しく微笑まれてグレンもつられて笑った。

パーティーが始まってそろそろ2時間。会場隅にある振り子時計が8時を指すから間違いない。

アレクがこちらをちらちら見ていたので、かわいそうだからアレクを拾って、子供達は退散しようというところで、ユーリが言い出した。

「テラスで、空をみようよ」

「はあっ？」

ケンが不思議そうな声を出す。それを見てユーリが説明しだす。

始まりは3歳の誕生日11（前書き）

累計10,000pv突破。

ありがとうございます。

更新もかなり遅いのに。

これからも頑張って行きます。応援よろしくお願いします。

始まりは3歳の誕生日11

いつものベッドに入る時間では、空も見れない。普段は、別に見なくてもいいけど、今日はフリユール流星群の日だし、グレンの誕生日だから、見せてあげたい。

「ということらしいよ?」

ユーリの支離滅裂な言葉をケンが綺麗にまとめてくれた。

フリユール流星群は、年に4回起こる流星群の一つで、西のアステイア大陸の空いっぱいに流れる流星群だ。

本で読んだだけの流星が見られると聞いてグレンは、ワクワクが止まらなくなり、リヒトとジョシユアを見上げる。

「その目で見ないでください。わかりました、わかりましたから」「少しの間だけですよ?」

優しい返事に浮かれるグレンは、ユーリに抱き上げられテラスへと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9296s/>

神は何を思う？

2011年10月10日02時11分発行